

## 漢魏洛陽城と出土銭貨

はじめに 奈良文化財研究所では、中国社会科学院考古研究所との間で、漢魏洛陽城に関する共同発掘調査の協約を結び、2008年より北魏宮城を対象とした発掘調査を進めている。現在の河南省洛陽市街地の東郊約15kmに位置する漢魏洛陽城は、後漢、曹魏、西晋、北魏が都城とし、北周宣帝の時期には荒廃した宮殿の再興がはかられた。このため、建物の基礎を形成する版築層をはじめ、土層の重複関係がきわめて複雑なものとなっている。

後述するように、洛陽遷都後の北魏から北周にかけての時代は、10年ないし20年の間隔で新たな銭貨の発行がおこなわれた。年代情報としては、「その初鋳年を遡るものではない」ということに限られるが、発掘調査によって検出された遺構または土層の時期決定に際しては、瓦、陶器とともに銭貨が一定の役割を果たすものと期待される。そこで、北魏以降に発行された銭貨を整理し、合わせて洛陽城内の調査により報告された事例を紹介することとした。

**北朝期の銭貨** 386年鮮卑族拓跋氏により建国された北魏は、439年華北を統一し、493年現在の山西省にある平城から洛陽に遷都する。北朝における銭貨铸造は、この洛陽遷都後にはじめて実施された。北魏では、孝文帝太和19年（495）に「太和五銖」（直読）を、さらに宣武帝永平3年（510）に五銖銭を発行した。この五銖銭は「永平五銖」とも呼ばれている。続いて、孝庄帝永安2年（529）に、「永安五銖」（直読）を発行する。

534年に北魏が滅びると、長安に都をおく西魏と、鄆に都をおく東魏に分裂するが、西魏では大統6年（540）、同12年（546）に五銖銭を発行したことが知られている。

いっぽう東魏では、孝靜帝武定元年（543）に北魏の錢形を援用した「永安五銖」を発行した。550年に東魏をうけて成立した北齊は、文宣帝天保4年（553）に「常平五銖」（直読）を発行する。

557年に西魏をうけて成立した北周は、武帝の保定元年（561）、新代の「布泉」を玉筋篆として新たに発行、武帝建德3年（574）には「五行大布」（直読）を、577年に北齊を倒し華北統一を果たしたのち、靜帝大象元年（579）に「永通万国」（直読）を発行した。

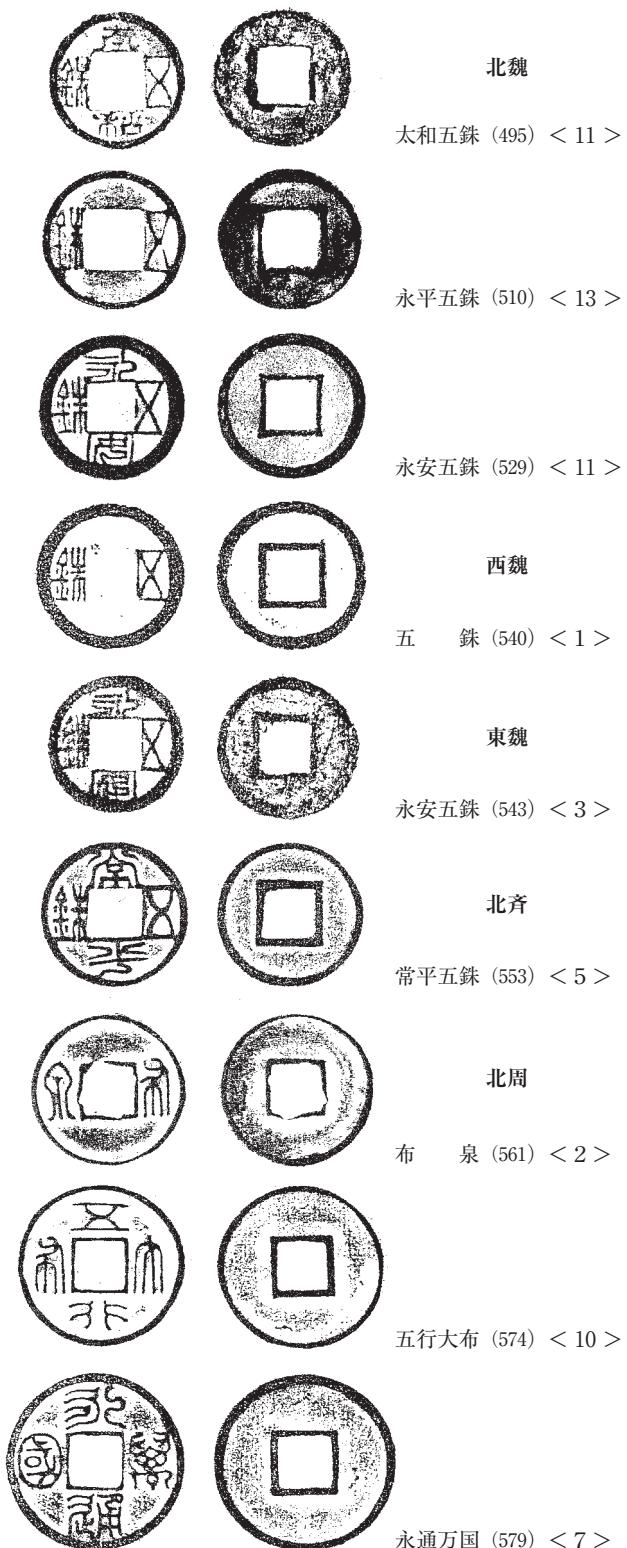


図26 北朝期の銭貨  
各銭種には複数の型式が認められるが、ここではそのうち1例を示した。<>内の数字は、文献5）に紹介された型式数を示す。

閻闔門の一括出土錢貨 2000年に実施された北魏宮城正門である閻闔門の調査では、門の前方、東闕西側のT110区第4層から錢貨27枚を納めた青瓷の小罐が出土した。

閻闔門基壇南側の堆積は5層に区分されており、このうち第4層は上面に北周期の建築遺構があり、これに用いられた磚と土層のありかたから、北周期の整地層と考えられている。その下の第5層は、北魏の建築が破棄された後に堆積したもので、その下部は北魏の生活面となる。T110区のある閻闔門の前方、東西の双闕と闕の間の広場も同様の層位関係となり、地表下50～65cmのところで厚さ10～15cmの整地土層第4層となる。

高さ17cmほどの小型の罐に納められた27枚の錢貨の内訳は、「五銖錢」1枚、「大泉五十」1枚、「常平五銖」12枚、「布泉」5枚、「五行大布」8枚である。「大泉五十」は、新の王莽により居摂2年(7)～建国5年(13)にかけて発行されたもので、当時流通した錢貨の組成の一端をうかがうことのできる良好な一括資料である。「五銖錢」については、隋代においても発行されることから、なお型式学的な検討を要すると考えるが、整地土の年代の上限の目安を、他の4種のなかで最も初鑄年の新しい「五行大布」の574年におくことができよう。

『周書』によれば、洛陽宮の新造は、北周宣帝の大象元年(579)にはじまり、同2年2月には、「新營大極殿」とみえ、同5月に宣帝(天元皇帝)の死により中止となつたことが知られる。元年11月発行の「永通万国」の有無が問題となるが、宮城中枢の整地の時期を考えるうえでひとつの手がかりとなろう。

今後の作業に向けて 閻闔門の北に位置し、2008年に共同調査を実施した北魏宮城二号建築遺址においても、「太和五銖」、「永安五銖」、「常平五銖」、「布泉」、「五行大布」などが出土したことが報告された。出土状況についての詳細は正式の報告を待つことになるが、洛陽遷都後の北魏宮殿の造営の経過、北周期における再興事業の事情をうかがい知る資料となる可能性がある。

また、北魏宮城は前代の建物基壇をさまざまなかたちで利用して造営されたことが知られており、断ち割り調査などで得られた錢貨資料は、こうした重複する版築層の時期決定に際しても有効な手がかりを与えるものと考える。なお、図26は文献5)、図27は文献2)より編図し、錢貨の縮尺はそれぞれ8:10、7:10である。(次山 淳)

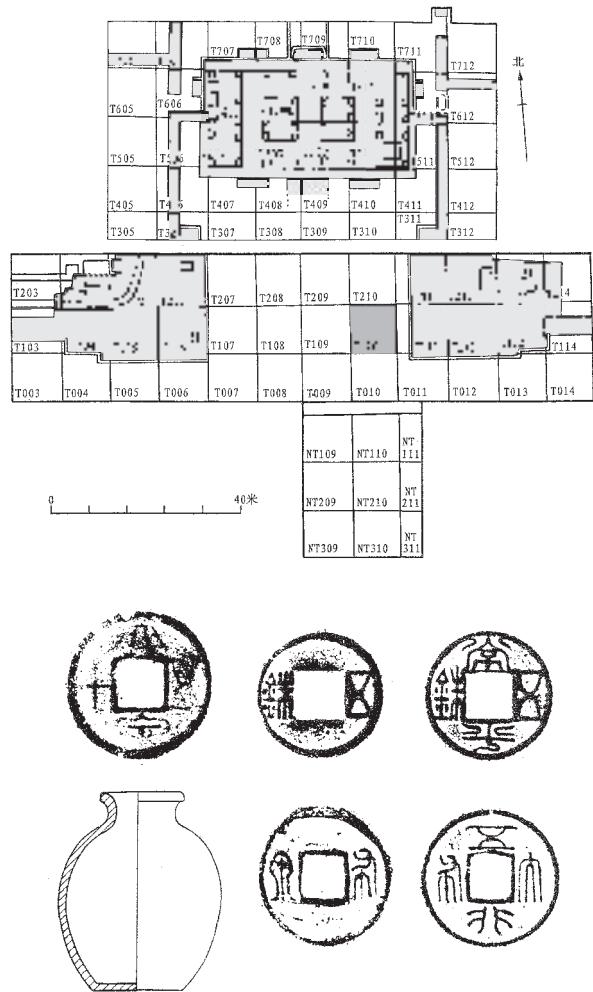


図27 北魏宮城閻闔門と出土錢貨

#### 参考文献

- 1) 杜金鹏・錢国祥編『漢魏洛陽城遺址研究』科学出版社、2007。
- 2) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽漢魏故城北魏宮城閻闔門遺址」『考古』2003年第7期、2003。
- 3) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所連合考古隊「河南洛陽市漢魏故城新發現北魏宮城二号遺址」『考古』2009年第5期、2009。
- 4) 蔡運章他『洛陽錢幣發現與研究』河南出土錢幣叢書之一 中華書局、1998。
- 5) 《中国錢幣大辞典》編纂委員会編『中国錢幣大辞典』魏晋南北朝隋編・唐五代十国編 中華書局、2003。
- 6) 山田勝芳『貨幣の中国古代史』朝日選書660、朝日新聞社、2000。
- 7) 宮澤知之『中国銅錢の世界 錢貨から経済史へ』佛教大学薦陵文化叢書16 思文閣出版、2007。

本稿は、平成21年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「日本初期貨幣史の再構築」（研究代表者：次山淳、課題番号：20320126）、ならびに運営交付金による「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」の成果の一部である。現地での調査に際しては、錢国祥氏をはじめとする中国社会科学院考古研究所漢魏洛陽隊の諸氏、城倉正祥氏、今井晃樹氏に多大なご配慮をいただいた。記して感謝の意を表する。